

シンガポール国立博物館における教育プログラム —博物館における学際的な学び：国際バカロレアの視点から—

Education Programmes at The National Museum of Singapore -Interdisciplinary Learning at The Museum : From The Perspective of The International Baccalaureate-

小池 研二

Kenji KOIKE

1 はじめに、研究の背景

本論は博物館美術館における鑑賞教育について国際バカロレアの美術教育の視点から考えていく一連の研究の一つである。筆者はこれまで国際バカロレアの美術教育について研究を続けてきた。一方博物館美術館における鑑賞教育についても研究を続けており、本研究ではシンガポール国立博物館で行われている教育プログラムを分析し、国際バカロレアの視点から考察を加えるものである。国際バカロレア IB^{*1} (International Baccalaureate) 初等課程 PYP (Primary Years Programme)、中等課程 MYP (Middle Years Programme) では学際的な教育(Transdisciplinary, Interdisciplinary な学び)を行っている。PYP ではテーマを決めた上で、探究のユニット (unit of inquiry) を中心とした学びを行い、MYP では「学習の姿勢」、「コミュニティと奉仕」といった5つの領域=相互作用のエリア (Areas Of Interaction) を各教科を通して学んでいくものである。なお MYP は現在改訂中であり、2014年9月/2015年1月から新しくなる。かなり大幅な改訂で、例えば AOI は IB グローバルコンテクストとなり、各領域の代わりに identities and relationships など6つのコンテクストが挙げられている。改訂の詳細は今後調査していくつもりである。ディプロマ資格プログラム DP (Diploma Programme) では各教科の枠組みが強いが、TOK (Theory of Knowledge = 知の理論) 等で教科の枠を超えた学習をしている。一方博物館美術館での学びも教科の枠を超えるものが多数存在している。シンガポール国立博物館 (National Museum of Singapore 以下 NMS) は、シンガポールの歴史、市民の生活、そして現代美術作家の企画展示という幅広い展示及び教育活動を行っており、美術だけに偏らない学際的な学びについて調査するのに適していると考えられる。さらにシンガポールではナショナル・エデュケーション (National Education)^{*2}、エンリッチメント(enrichment)^{*3} という我が国ではなじみの薄い特徴的な教育も行われており、それらと美術教育との関連も探ってみたい。今までの調査は美術館が中心であったがあえて歴史をメインとする博物館を調査する意義は以上のようなことであり、より幅広い形で美術教育について俯瞰的に考えることができると思う。シンガポールは IB のアジア太平洋オフィスがあり、IB のアジアの中心とみることができる。IB を導入している学校も多くあり、その意味からも NMS を IB の立場から見るとは意味がある。

2 研究の方法、方向性

研究の方法は担当者へのインタビュー及び現地での設備の調査、実際にプログラムへの参観による調査等である。他にも博物館発行の資料、website等の調査も行った。

2013年3月8日(金)10:00からNMS教育担当プログラスマネージャーVicky Wong氏に博物館の歴史、組織の概略、展示の特徴等についてインタビューを行った^{*)}。インタビューの後、展示ギャラリー及びスタジオで行われるワークショップを見学した。これらを基に同博物館で行われる教育プログラムの特徴についてIBの視点から学際的な学習活動について見ていくものとする。

3 NMSの概要

3.1 NMSの歴史

Wong氏へのインタビュー、website、博物館発行のパンフレット等の資料によると、シンガポール国立博物館(以下NMS)は1887年にラッフルズ図書館-博物館としてオープンしている。その歴史はさらにさかのぼり1823年にシンガポールの創設者と言ってよいトーマス・ラッフルズ(Thomas Stamford Raffles)によってシンガポールにおける博物館の構想が練られている。そして、1849年にシンガポール図書館-博物館として現在のラッフルズ協会(Raffles Institution)の場所に作られた。



図1 NMS外観

現在の建物は1882年にヘンリー・マッカラム(Henry McCallum)により設計される。その後1906年に増築されている。Wong氏によると、スタート時は自然史博物館であり、アートについては最初はフォーカスしていなかった。1942年から1945年までの日本占領時は、昭南博物館と名前を変えている。1960年に図書館と別れ、1965年の独立時に国立博物館になっている。1993年国家遺産委員会(National Heritage Board)の管轄となり、国立歴史博物館となった。他に美術館、アジアシビリゼーションミュージアムもできた。さらに2006年国立博物館としてリニューアルオープンしている。

3.2 NMSの構造

1882年に設計された旧館部分、1906年に増築された部分(以下1906年部分)、そして2006年に増築された部分(以下2006年部分)の3つの部分からなる。1906年部分は旧館と似た意匠で統一感がある。増築部分といっても、今から100年以上前の建築物であり旧館との年代差も少ないため2つの部分の差はほとんど感じないのは当然と言える。しかもその連結部分は2006年のリニューアルによりガラス天井を使っており、十分な採光を取り入れている。さらに2006年部分はモ



図2 2006年部分との結合部
ガラスを使い開放感がある

ダンな表現であるが、シンプルな表面処理により他の部分に影響を与えることなく調和した構造になっている。こちらの連続部分は中庭のようなイメージでさらに開放的な雰囲気になっている。また、2006年部分はスペースを十分確保し、同時に正面から見た場合に旧館のイメージを損なわないようにするため、地下に掘り下げて高さを抑え全体的なバランスを保っている。旧館の正面入り口にはドームがあり、その内部は円形空間（ロタンダ）になっている。また、2006



図3 歴史ギャラリー入り口

年部分の館内空間にもロタンダが作られている。これは歴史ギャラリーへの入り口になっている。旧館のロタンダと2006年部分のロタンダは制作年において100年以上の差があり建築から受ける印象は全く違うがそれぞれ展示空間の入り口という意味を来館者に感じさせる。歴史ギャラリーはNMSの主要な展示部門であり、館全体の入り口との関連性を意識していると考えられる。

3. 3 NMSの展示空間

3. 3. 1 NMSのギャラリー

NMSの展示空間はシンガポールの歴史について展示するシンガポール歴史ギャラリー、ウィリアム・ファーカー（William Farquhar）による植物画や動物画を展示してあるGoh Seng Chooギャラリー、シンガポールの人々の日常に関連するものをテーマとして展示するシンガポールリビングギャラリーがあり、リビングギャラリーは映画と演劇をテーマとしたフィルム&ワヤンギャラリー、食をテーマにしたフードギャラリー、衣をテーマにしたファッションギャラリー、家族の肖像写真などをテーマにしたフォトグラフィーギャラリーの4つがある。他に企画展を行う展示会場があり、その他に教育のためのスタジオ等がある。

3. 3. 2 歴史ギャラリー

Wong氏によると、歴史ギャラリーの展示は様々な工夫が凝らされている。壁面に情報は無く、コンパニオンと呼ぶタブレット型端末を使って展示説明を行っている。説明では日本語の説明もある。筆者も使用したが操作も簡単であり歴史を学ぶという観点からは有効であると考えられる。コンパニオンは文字だけでなく、画像や動画、音などの様々な情報を伝えることができる。我が国にもよくある音声ガイドに映像が加わったようなものである。また、展示の前でいくつかの説明を選択することができ、各自の好みに合った鑑賞学習が可能である。このようなツールは今後多くの博物館、美術館に普及すると思われる。ただし、美術的な分野での使用では鑑賞が画一的になってしまう点が懸念される。現在すでにある音声ガイドでもその善し悪しはさらに検討されるであろうが、タブレット型端末の活用については一考の価値はあると考える。

展示の順路はイベントとパーソナルの2つに分かれている。イベントとはオフィシャルな歴史である。どのような事件が起こりどのような人物が影響を与えたのか、その結果国

家や民族はどのようになったのかなどを事実に基づいて展示し説明している。一方パーソナルは普通の庶民の生活に焦点を当て、どのように暮らしていたのか、どのような文化の流れがあったのかを知ることができる。2つの学びはもちろん別々のものではなく歴史をいわばフォーマルとインフォーマルの異なった視点から見ていくものである。コースは分かれているところもあるが途中で合流するところもあり、いつでもコースを変えることができる。このようにして複数の視点から歴史を学んでいく。展示物は時間的な流れがわかったり、当時の家や街角の空間を再現してあったりと様々な注意が払われており、鑑賞者が興味を引くように効果的な方法によって展示されている。「歴史ギャラリーは映画を見るような形で見ることができる (Wong 氏)」というように、何がどのように行われたのかをできるだけアクティブに受け止められるような工夫が、様々な展示方法や展示内容を実際に体験したことにより感じられた。

Wong 氏は教育担当であり、様々な教育プログラムを企画している。その中で歴史的な内容を扱うものもあり、歴史教育やナショナル・エデュケーションについては次のように述べている。

「これはナショナル・エデュケーションの一つです。子どもたちはつまらないと感じたり、政府のプロパガンダがあるように感じたりすることがあり、子どもたちはあまり興味ないのですけれども。ですから、(難しいことを) 学んでいるのではないように思ってもらって、楽しく学んでもらわなければいけないので大変なのです」これは、役者を使ってインドからの移民の話をして、歴史を楽しく学んでもらおうという企画展 (Island Adventures) の説明を受けたときの言葉である。シンガポールは多民族国家であり、シンガポール人という概念が以前は弱かった。政府もこのことを承知しており、歴史教育、ナショナル・エデュケーションに力を入れているのであろう。そのこともあり、興味を持って楽しく歴史を学ぶことは国家的に重要なことであり、歴史に関する NMS の使命も大きいと考えられる。

4 NMS の教育プログラム

NMS の教育プログラムについて見ていく。プログラムの参加者等のデータについて、Wong 氏に email で確認した。教育プログラムには年間 8500 人の子どもたちが参加する。ただしこの数字は料金を払った参加者の人数である。プログラムに参加しないで博物館を訪れる児童生徒の数はおよそ年間 200,000 人である。年間 220 のプログラムを実施する。1回のプログラムの参加者数はおよそ 35 人である。プログラムに参加する子どもは幼稚園から小学校低学年が多い。プログラムの内容については後ほど述べるが、最も人気が高いレギュラープログラムは「自由な発想で」「ストリートフードがいっぱい」である。これらは幼稚園から小学校低学年 (5 - 8 歳) のためのものである。これらのプログラムはシンガポールの多文化主義 (multiculturalism) に触れることができる。「生き生き人形劇」も人気が高い。これらのプログラムはシンガポールのスクールシラバス⁹⁾に対応している。

教育プログラムはいくつか種類があるが、ここでは学校の休業中に行われた特別プログラム、作家の企画展と協賛して行ったプログラム、常時設定されているレギュラープログラムについてみていく。

4. 1 特別プログラム

4. 1. 1 Island Adventures

学校や幼稚園向けにレギュラーのワークショップがいくつかある。また、学校の長期休業中には子どもや家族向けの特別展が開催される。2012年は「Island Adventures」というタイトルで5月26日から7月22日まで行われた。これは「子ども、両親、先生や若々しい心を持っている人に新しい体験を送るもの」で「シンガポールの歴史や遺産について理解する入り口となるもの」⁶⁾という位置づけである。Wong 氏の話や資料によると複数の教育的なプログラムが用意され、子どもたちが楽しみながらシンガポールの歴史を学べるとのことである。例えば「Ahoy! All onboard!」コーナーでは実際にロビーに船を造り、そこで移民の体験をしながら活動をする。なぜ人々はシンガポールにやってきたのか、シンガポールはどのような人々が渡ってきたのかを体験的に学習するのである。

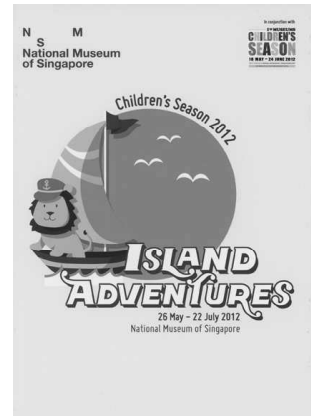


図4 Island Adventures
のパフレット

「Port City」コーナーでは、19世紀や20世紀初頭のシンガポールの生活をロールプレイなどで体験しながら、港湾都市として発展した歴史などを学ぶ。靴屋や露店商になって、新しい生活を始める人々を助けようといった活動が行われる。「シンガポールは多民族国家だから、昔は移民としてここに集まってきました。いろいろな人種がいます。例えば宝石を持って来た人や、金を探そうと来た人もいます。それを子どもたちは遊びながら学ぶのです（Wong 氏）」この展示では子どもたちが楽しく学べるように触っていいものを用意し、実際に見て触って体験しながら学んでいく工夫がなされている。これらのハンズオン展示は多くの子ども博物館等で行われているが、普段展示物に触れない子どもたちにとって新鮮であり学習効果も高いと思われる。

シンガポールの生活について学んだ後の活動については「Building Singapore」という活動が紹介されている。どのようにシンガポールは発展してきたのかをシンガポールに関連した特徴的な多くの建物のおもちゃを使って学んでいくものである。また、「Island Adventures-An Interactive Installation」は、インスタレーションの活動によって過去から未来のシンガポールの風景を作ることを楽しむ活動である。

さらに無料公開日を設け、「Island Adventures - Roving Act」という期日が指定された活動を設けている。過去からの不思議な人たちが登場し、いっしょに活動を楽しむというものである。登場する役者は実際に子どもたちと会話をし、当時のことを紹介し、質問にも答えていく。さらに当時の様子をライブの演技によって伝える。臨場感のある文字通り生きた博物館教育が行われる。

他にも「Island Adventures」には次のプログラムがある。

「Island Tunes - A Song - and Dance Performance」子どもたちとパフォーマーのセッションでシンガポールの歴史や文化によって動機づけられたユニークな旋律のダンスや歌を楽しむものである。

「Island Adventure Craft Activity」展示されている様々な活動を体験したあとに、ユニークな工作を行うものである。先着500名で、制作した工作は家に持ち帰ることができる。

「The Fearless Twins And The Magical Kaleido: A Narrow Escape」記念建造物保存委員会

(Preservation of Monuments Board) と協力しているものである。絵本を見ながらの活動である。登場人物の双子の子どもたちがおじさんと一緒に冒険に出発し、1935年に到着する。そこで見たものは、現在歴史建造物になっている建築物という設定である。最初にこのストーリーの絵本を購入しておく必要がある。

以上のような活動である。

4. 1. 2 Being Together

次に訪問時に開催されていた企画展と関連した教育プログラムの例である。以下はWong氏の説明の要約である。

「タイトルが『Being Together Photo Essay Student Competition』というもので、自分たちで写真をとってストーリーを作っていくものである。写真であるから動画ではないが、映画の撮影と同じで連続性のあるストーリーを考えて制作する。Being Togetherとは一緒にいるというものである。家族について、教室についてなど写真を撮ってストーリーを作り上げる。文章でもいいし、物語を作ってもいいし、キャプションだけでもいい。Being Togetherはシンガポールの写真作家John Clangの展覧会⁷⁾のテーマにもなっている。NMSの2006年部分の展示ギャラリーで2013年1月23日から、5月26日まで特別展が開かれていた。教育プログラム「Being Together」の作品はJohn Clangの作品を見てヒントを得て子どもたちが作ったものである。このプログラムは現在学校を巡回している。John Clangの作品と、子供の作品と、美術館の持っている作品が巡回してる。生徒たちは自分たちの活動に満足しており、プロと一緒に作品が作れたと思っている。NMSでは2週間展示された。両親や友達を連れて一緒に写真を撮るなどしていた」

このプログラムは10～16歳のジュニアカテゴリーと17歳以上のカテゴリー (Tertiary Category) の2つに分かれている。以下作品を紹介する。

17歳以上のカテゴリーの一等賞作品は「Dinner Together」というタイトルである。

6枚組の写真にエッセイが記述されている。写真はすべて室内風景でテーブルが中央にありその上にぬいぐるみや本、テニスラケットなどの身の回りのものが置かれている。テーブルにはランチョンマットが敷かれフォークやナイフ、スプーンなどが並べられている。それは家族の日常の食事がこれから始まるような感じである。さらに、テーブルの上には鏡が置いてあり、鏡の中に若者の顔が映っている。自分たちが生活している日常の品々と鏡に映っている顔のみが画面の中にあるが家族はどこにもいない。写真とともに作品の一部となっている文章の中で「家族は全員がそこにいたときだけ家族と言えるのか」と問いかけている。

ジュニアカテゴリーの一等賞の作品は「家」というタイトルである。11枚の組写真で、各写真にキャプションが付いている。老母と思われる女性が一人でテレビを見ていると思われる写真からストーリーは始まる。女性は後ろ姿で頭部と肩のみ映りしかも半分以上がトリミングされてアップになっている。女性が見ているテレビと思われる映像はピントがぼけていてほとんど見えない。「一人は淋しくない」というキャプションである。次に女性が窓もしくはベランダから外を眺める写真と手紙と思われる文面を写した写真が示される。キャプションに「目を閉じて、あなたを待っている。あなたのことを思うと満足する」とあり、つぎに回想と思われるモノクロの写真が続く。小学生くらいの男の子が勉強をし

ているところ、誕生カードを手にして喜んでいるところが写し出されている。「あなたは私を必ず幸せにする」「あなたの成長は私の誇り」といったキャプションが付く。そして、手紙が映り「期待しながら楽しみにしている」とある。次に成長した男の子が大きな荷物と共に家につき、最後は男の子がラーメンのような簡単な食事をしている場面で終わる。「家はあなたが家を出るために成長する場所であり、大人になって帰ってきたいところである」という作品である。

4. 1. 3 このプログラムから言えること

他にも2位や3位の作品もイスラムとキリスト教をテーマにしたもの、兄弟愛をテーマにしたもの、シングルペアレントである父と一人息子をテーマにしたものなど高レベルのものばかりであった。このプログラムは教育担当の Wong 氏とキュレーターとで一緒に作り上げたものである。写真という現代芸術をうまく使いエッセイや文章などの言葉を組み合わせることにより芸術性の高い作品を子どもたちがつくりだしている。また、作家と接点を持ちながら活動をしていくことは、子どもたちにとっても貴重な体験であり成就感も大きい。そして博物館で展示されたり、学校を回っていくことにより参加者はさらに満足度を増していくと考えられる。さらに、芸術作品とはどういうことか、創造性とは何かを実際に学んでいくと考えられる。

Wong 氏に「自分のイメージが出るのはいいですね。絵を描くのはテクニックの問題があって難しいが写真ではテクニックの差が出にくい」という感想を述べると、「写真だったらみんなが参加できますね。」という回答がかえってきた。このプログラムは視覚芸術の分野であり、美術教育に大きく関わるものである。我が国の図画工作・美術でも写真を活用する表現が教科書にも掲載されている⁸。デジタルカメラ等情報機器の教育現場への普及により写真を活用した美術教育は今後ますます広がっていくと考えられる⁹が、本活動はその具体的な例として十分参考になると考えられる。特に、写真だけでなく、文章や言葉を加えることによりストーリー性を創り出していく活動は、図画工作・美術を中心に国語、社会科、英語等の学習と連携した幅広い活動を行うことも考えられる。

4. 2 レギュラープログラム

レギュラープログラムは博物館で常時企画しているプログラムである。プログラムによって幼稚園児、小学生から中学生それ以上と各年齢に対応できるようになっている。説明を受けたものを紹介する。内容は2013年3月現在のプログラムである。各データ及び活動の概要はインタビュー時に入手した博物館発行の資料を基にしている¹⁰。

4. 2. 1 ストリートフードがいっぱいー食べ物を通してシンガポールを発見する (Street Food Galore - Discovering Singapore Through Food)

- ・プログラムタイプ 対話型ツアー (Interactive Tour)
- ・開催可能日 全ての平日
- ・レベル 幼稚園年中と年長 (5 - 6 歳) / 小学校1年生、2年生 (7 - 8 歳)
- ・活動時間 1 時間
- ・料金 生徒1人8ドル

- ・活動の制限人数 20～25人
- ・内容 庶民の話やドラマ仕立ての演技によって、ラクサやサテなどの露店で売られる料理を考えながら、庶民がいかに関シガポールの多文化な世界を形作ってきたかを学ぶものである。
- ・カリキュラムとの関連 社会科、ナショナル・エデュケーション(national education)、エンリッチメント

4. 2. 2 昔のシガポールからのお話－対話型ツアー (Tales from Old Singapore - An Interactive Tour)

- ・プログラムタイプ 対話型ツアー (Interactive Tour) & ワークショップ
- ・開催可能日 全ての平日
- ・レベル 小学校1年生、2年生 (7－8歳)
- ・活動時間 2時間
- ・料金 生徒1人12ドル
- ・活動の制限人数 20～40人
- ・内容 古い時代のシガポールの歴史を、音楽やコスチューム、小道具も活用した劇やお話で体験するものである。子どもたちは学んだことをさらに深めるために、歴史ギャラリーで特別にプログラムされたガイドツアーに参加し、シガポールの初期の生活や文化を学ぶ。その後、ポップアップ絵本を制作して持ち帰る。
- ・カリキュラムとの関連 英語、社会科、エンリッチメント

4. 2. 3 自由な発想で！－私の60年代ファッションワードローブ (Out of the Box! My 60s Fashion Wardrobe)

- ・プログラムタイプ ワークショップ
- ・開催可能日 全ての平日
- ・レベル 幼稚園年中、年長 (5－6歳) / 小学校1年生、2年生 (7－8歳)
- ・活動時間 1.5時間 / 2時間
- ・料金 生徒1人10ドル / 12ドル
- ・活動の制限人数 25～40人
- ・内容 ファッション、音楽、ダンスを通して活気あるシガポールの過去を体験する。博物館のポピュラーファッションギャラリーの展示を見学し過去の文化を知り、実際にコスチュームを身につけロールプレイをしたり、工作をしたりして創造性を伸ばす活動もする。
- ・カリキュラムとの関連 社会科、ナショナル・エデュケーション、エンリッチメント

4. 2. 4 生き生き人形劇 伝統的な中国の人形劇を通してシガポールの歴史を発見する (Puppets Alive! - Discovering Singapore's History through Traditional Chinese Puppetry)

- ・プログラムタイプ ワークショップ (英語、標準中国語、バイリンガル)
- ・開催可能日 全ての平日
- ・レベル 幼稚園年中、年長 (5－6歳) / 小学校3年生から6年生 (9－12歳)

- ・活動時間 1.5 時間 / 2.5 時間
- ・料金 生徒 1 人 10 ドル / 12 ドル
- ・活動の制限人数 25 ~ 40 人
- ・内容 中国の伝統的な人形劇を体験するワークショップを通して、シンガポールの文化遺産について学ぶものである。子どもたちは、お話、人形劇を体験しフィルム&ワヤンギャラリーでのツアーを体験し、伝統的な大道芸や芸術のフォルムの重要さや文化を学び、自分たちで人形を制作する。
- ・カリキュラムとの関連 社会科、ナショナル・エデュケーション、エンリッチメント

4. 2. 5 私たちの世界の人々写真のワークショップ (The People in our World - A Photography Workshop)

- ・プログラムタイプ ワークショップ
- ・開催可能日 土曜日 (全日) または平日 3 日間
- ・レベル 中学 1 年生とそれ以上 (13 歳&それ以上)
- ・活動時間 9 時間
- ・料金 生徒 1 人 50 ドル
- ・活動の制限人数 15 ~ 25 人 各クラス最低 15 人の参加者が必要。
- ・内容 基本的な写真の技術を学ぶプログラムである。個人的なストーリーを表現するためのポートレートを制作するために構成、ライティング、空間の使い方を学んでいく。参加者はギャラリーを見学し、写真の歴史、ドキュメンテーションとしての写真の使い方を学ぶ。参加者は現代的な視点から物語性を持ったポートレートを作成する。
- ・カリキュラムとの関連 記述なし

4. 2. 6 5 分間で思い出すことーフィルムワークショップ (Remembering in FIVE - A Film Workshop)

- ・プログラムタイプ ワークショップ
- ・開催可能日 土曜日 (全日) または平日 3 日間
- ・レベル 中学 1 年生とそれ以上 (13 歳及びそれ以上)
- ・活動時間 9 時間
- ・料金 生徒 1 人 15 ドル ワークショップごとに 28 ドル
- ・活動の制限人数 12 ~ 24 人 参加者は 4 つのチームに分かれる。ワークショップは各クラス最低 12 名の参加者が必要。
- ・内容 参加者は実際にフィルムを撮影する前に絵コンテのことや撮影や編集のガイダンスを受ける。そしてリビングギャラリーを訪れ、自分たちの国について情報を仕入れながら 5 分間の物語のフィルム作品の主題を探す。参加者はシンガポールの変化や発展、出来事を学んで作品にする。映像を作ることで過去を記録し、記憶し共有するためのツールとしての映像表現を学ぶ。

4. 2. 7 シンガポールの歴史ワークショップー新しい国 (Singapore History Workshop Series - New Nation)

- ・プログラムタイプ ワークショップ
- ・開催可能日 すべての平日
- ・レベル 中学1年生、2年生（13歳及び14歳）
- ・活動時間 3時間
- ・料金 生徒1人15ドル ワークショップごとに28ドル
- ・活動の制限人数 25～40人
- ・内容 教育省の社会科、歴史そしてナショナル・エデュケーションのシラバスを補完するために特に開発され、国家を形成する時期に焦点を当てているプログラムである。ゲーム形式やロールプレイ、グループディベートによる双方向で生徒中心の学びを行うもので、博物館の触れる展示物や記録資料、ヒストリーギャラリーの新しい国家のコーナーの特別なガイドツアーなどによって学んでいくものである。生徒はシンガポールの基礎にある政治的、経済的、社会的、文化的な力に共感し正しく理解することを学ぶものである。
- ・内容 カリキュラムとの関連 歴史、社会科、ナショナル・エデュケーション、英語

4. 2. 8 シンガポールの歴史ワークショップー日本の占領 (Singapore History Workshop - Japanese Occupation)

- ・プログラムタイプ ワークショップ
- ・開催可能日 すべての平日
- ・レベル 中学1年生、2年生（13歳&14歳）
- ・活動時間 3時間
- ・料金 生徒1人15ドル ワークショップごとに28ドル
- ・活動の制限人数 25～40人
- ・内容 インタビュー、ビデオ、実物資料、グループ活動、クイズ、ヒストリーギャラリーの第2次大戦コーナーへの特別なツアーを通して、生徒は日本による占領の時代、衝撃的で厳しい時代について学ぶものである。この経験的なワークショップは、教育省の社会科、歴史、ナショナル・エデュケーションのシラバスを補完するために特別に開発されたものという位置づけになっている。

カリキュラムとの関連 歴史、社会科、ナショナル・エデュケーション、英語

4. 3 教育プログラムの実際：人形劇のワークショップから

これらのプログラムの中で「生き生き人形劇」を実際に見学した。プログラムはギャラリーで人形劇に関する展示を鑑賞しながらギャラリートークを行うツアーと、スタジオで実際に人形を作ったり、身体全体を使って表現活動をしたりする活動の2つからなる。当日は幼稚園児を対象とするものであった。

園児は最初にギャラリーを見学し、その後スタジオで活動するグループとその逆のグ



図5 ギャラリー内で 展示の鑑賞

ループの2つに分かれていて、ギャラリーを最初に見学するグループに同行した。グループは約25名である。ギャラリーでは実際に使用されていた人形劇用の舞台や人形等が展示されていた。ガイドをするのは実際の人形劇の役者であり、子どもたちの興味を引くように劇の行われた当時の様子、どのようなときに劇が行われたか、どんな劇があったかなどを説明していた。Wong氏によるとこの舞台「The Xin Sai Le Puppet Stage^{*11}」は現在国の所有となっている。様々な装飾を施し状態も非常に良い。「Treasures of the National Museum^{*12}」に指定されている。このような移動可能な舞台を街の空き地などに設置し劇を行っていたそうである。舞台を鑑賞したあとは劇に使う人形の展示品を鑑賞した。ガイドは人形にはどのような種類があるか、役によってどんな特徴があるかなどを対話を交えながら説明していた。

これらの説明の後スタジオに入り、実際に人形を使ってパフォーマンスをしたり、人形を作ったりする活動を行った。スタジオはかなり広く小学校の普通教室よりも2回りほど大きい印象であった。水回りも完備しており絵を描いたり粘土による立体制作をしたりするなどの活動にも便利そうであった。活動は始めに全員で手をつないで輪になり全身を使った運動を行い緊張感を取り除いていた。園児はとても楽しそう



に動き、みるみるうちにこの場に溶け込んでい 図6 ギャラリー内で人形を見ながらったようである。活動自体は役者であるガイドが指示を出して手足を動かしたり、寝そべったり、場所を移動したりすると言った至極簡単なものであるが、その中にも人形の動きを入れるなどして人形劇につなげていくようであった。このような全身運動は伝統的芸術品ともいえる人形をみているだけでは集中力が落ちて興味が半減してしまうであろう幼児や児童にとって非常に有効であると感じた。また、鑑賞活動と表現活動をスムーズにつなげる上でも気分転換や主体的に関わるといった点で効果があると改めて感じた次第である。

身体全体を使った動きのある表現活動から次に人形を使った演技に入った。役者が使う人形はすべて本物であり、立派なものであった。伝統的な表現が施されており、正義の味方、お姫様、悪役がみてすぐわかるものであった。これらの造形表現は中国の京劇などの伝統芸能にも共通するものと思われる。また、日本の歌舞伎や文楽といったものにも直接はつながらないであろうが、みているとどこことなく共通点があるように思われた。

人形劇はさすがに本職の役者がするのであるから、参観している立場からみてもおもしろいものであり、たちまち劇の世界に引き込まれる。もちろんセットもなく、立てかけたホワイトボード1枚を舞台代わりに一人の役者が演じていた。演じると言っても簡単な会話による一人劇の様なものであった。それでも声色や口まねの音楽、絶妙な人形の動き、子どもを意識した役者の動きや言葉により子どもたちは十分にパフォーマンスを楽しんでいるようであった。子どもたちに直接話しかけたり、指名され前に出てきた子どもと会話を楽しんだりするなどエンターテインメント面での様々な工夫が見られた。この活動をする

前にギャラリーで見た舞台や人形のイメージが、ここでの活動に生きてくると思われる。もちろん幼児のことであるから忘れている子どももいるかもしれないが、それでも心のなかのどこかでつながっているのであろう。実際に人形を作るときなど、興味を持たず何もできないといった子どもは一人もいなかった。また、スタジオでの活動の後に、展示物を見ているグループもパフォーマンスを体験した後での鑑賞はより深いものになると考えられる。これらの活動がうまくつながるのが博物館での教育の利点であることが改めて確認された。



図7 役者の説明 人形を使って

このワークショップで使用した人形は高さが 50 センチメートルほどで指人形のような構造である。中指で頭を動かし、親指と薬指で手を動かす。男性の人形の足は 2 本の筒がぶら下がっているだけであり、女性のもは腰からしたがスカートのようにになっている。細かい仕掛けにより髭や冠の飾りが動くようにしてあり、見ていて飽きない。これらの仕掛けがわかるような衣服を透明にした人形なども使用して人形の独特の仕掛けも学ぶこともできるワークショップとなっている。人形のいろいろな仕掛けを知ることにより、伝統芸能の質の高さ、先人たちの知恵を子どもたちは身をもって学ぶことになる。美術的な創造活動の技法面についてもここで学んでいると言える。

これらの演技の後、子どもたちは人形を制作する。あらかじめ作られた布製の人形の形になっている袋状のものに顔を描いたり服の模様を描いたりしながらオリジナルの人形を制作していく。スタジオ内ではマーカー等を使って顔や簡単な模様を描くだけであるが、Wong 氏の話によると幼稚園に帰ってから毛糸で髪の毛を付いたり、布などで服を飾ったりする造形活動をする幼稚園や小学校が多くあり、さらに自分たちの作った人形を使って劇をおこなう所もある



図8 人形を作る

とのことである。これらの活動は教科が分かれていない幼稚園では一般的であるかもしれないが、小学校では教科を超えた学際的な活動と捉えることができる。造形教育や文化的な歴史教育、音楽、劇といった多くの活動が人形劇といったテーマで行うことができるのである。博物館の展示物を単に説明を受けながら見るだけでなく、プロの役者による話を聞き、その演技を見て、自分たちも身体全体を使って体験し、自分たちでオリジナルな作品を作り、それを使って劇をする。このような流れは教科を超えた学習と言うことができるであろう。

4. 4 他の活動について

他のレギュラープログラムについてみていくことにする。他のプログラムは実際に体験

したわけではなく Wong 氏のスライドを使った説明と資料から考察を加えるものである。

4. 4. 1 ストーリーフードがいっぱい

幼稚園及び小学校 1, 2 年生対象の低学年向けプログラムである。フードギャラリーでの見学と劇仕立ての活動がメインになる。シンガポールに古くからある食文化を取り上げることで子どもたちにダイレクトに伝わるプログラムである。特に露店で扱われていた料理を紹介しながら歴史を学んでいく所に大きな特徴があると考えられる。宮廷料理等の高級な料理ではなく、庶民の食に焦点を当てているのが重要である。このことにより、自分たちも知っている食文化を考えながら、リラックスしてシンガポールの文化を学べるのであろう。「ワークショップでは 4 つのリビングギャラリーや歴史ギャラリーなどを活用することが NMS の特徴である、多くの優れた展示品があるのが博物館の特徴であり、ギャラリーを活用できることが博物館のメリットである」と Wong 氏は説明していた。食の展示室は閉館中であいにく見ることはできなかったが非常に興味深い内容である。

4. 4. 2 昔のシンガポールからのお話

これも小学校低学年向けプログラムである。このプログラムでは歴史ギャラリーの見学とシンガポールの歴史に関する劇や話を体験する。小さい子どもたちに興味、関心を持たせながら、わかりやすく歴史を教えるにはどのような講座内容にすべきか、を考えられている。例えば音楽、コスチューム、小道具といった子どもたちが興味を引くような装置を導入し、単なる歴史の学習といった内容になることを避けている。また、最終的にポップアップ絵本を制作させることで目に見える形で子どもたちに活動の記録を持ち帰らせるようにしている。ポップアップ絵本の制作では、どの程度の内容を作らせるのかわからないが、制作自体は基本的なポイントを押さえれば比較的簡単にできる。美術教育にも関連するところであるので我が国の博物館教育の参考例になる可能性がある。自作の絵本と言うことで愛着もわくであろう。歴史をどのように絵本にさせるのかは大変興味深いところであり、今後可能であれば調査したい。

4. 4. 3 自由な発想で

このプログラムも一般市民の視点で歴史について考えていくものである。ファッション、音楽、ダンスという子どもたちも楽しくなるような手段を使いながらシンガポールの歴史を振り返る。ファッションギャラリーはパンフレットによると「1950 年代から 1970 年代にかけてのシンガポール女性のアイデンティティの変化を、ファッションの移り変わりを通して見ていきます¹³⁾」とあり、女性のファッションの変化からシンガポール経済の発展していく時期を連想して歴史を考えるようになっている。豊かさを手に入れるとともに西洋化されていく当時の様子が再現されており、展示空間も興味深い。そのような展示を見て当時をイメージしながら、音楽やダンスなど効果的な活動が行われると思われる。

4. 4. 4 私たちの世界の人々

中学 1 年生以上のプログラムである。カリキュラムの関連が示されておりどのような学びと関連するのかはっきりとはしないが、写真の基礎を学びながら歴史を学んでいくも

のと考えられる。「Being Together Photo Essay Student Competition」と同様に写真を使って個人的なストーリーを作っていく。写真ギャラリーは「シンガポールの家族が過ごした過去 100 年の間にどのように変化してきたか写真を通してみることができる^{*14}」とある。またパンフレットには「19 世紀の英領マラヤは多くの人々にとって出稼ぎに来る場所であり家族は本国に残してきた。20 世紀初頭から女性の移民も増え、家族も形成されてきた」と説明されている。ギャラリーでは各時代の多くのポートレートが展示され、シンガポールの家族の歴史を垣間見ることができる。これらを見た上で、過去のそして現代におけるポートレートはどのようなものなのか、何を表現することができるのかを学んでいくのだろう。

4. 4. 5 5 分間で思い出すこと

中学 1 年生以上のムービー制作を扱ったプログラムである。説明によると 4 つのリビングギャラリーを取材してテーマを見付ける。これらのギャラリーは全て日常生活に直結したものであり、庶民の歴史を見ることができる。その中から庶民の文化を感じ取りながら、自分たちの映像作品を作っていく。映像は作者の意図を持ちながら表現することが可能である。視覚、聴覚を使い、時間的な流れを使って表現するため、機材の扱い方の他にも基礎的なテクニックを学ぶ必要がある。このプログラムでは撮影や編集のガイダンスを行うようになっている。自由に作品を作るのではなくシンガポールの庶民の文化を学んだ上での表現である。このプログラムも、カリキュラムとの関連が記されていない。学校の生徒以外も対象にしていると思われる。しかし内容としては、歴史、社会科、ナショナル・エデュケーション、エンリッチメント等が考えられる。

4. 4. 6 シンガポールの歴史－新しい国

歴史教育をはっきりと前面に押し出したプログラムである。歴史が浅くしかも多民族国家であるシンガポールでは歴史教育、ナショナル・エデュケーションは重要視されている。それが NMS のような博物館で歴史をテーマにしたプログラムが存在する理由であろう。「教育省の社会科、歴史そしてナショナル・エデュケーションのシラバスを補完するために特に開発され、国家を形成する時期に焦点を当てているプログラム^{*15}」と記されており、歴史教育、ナショナル・エデュケーションをさらに深化することが目的であることがわかる。

4. 4. 7 シンガポールの歴史－日本の占領

これも歴史についてのプログラムで特に日本の占領時代に焦点を当てている。このプログラムに限ったことではなく全てのプログラムの内容について学校毎にガイドする内容を変えるなどの調整をするかと Wong 氏に質問したが、このプログラムを例にとり次のような答えが返ってきた。

「学校によって（ワークショップの内容を変えること）はしません。こちらの方は全部決めて準備をするから各学校に合わせて、ということはいけません。例えばこの場合、日本が占領したときのものはセンシティブですし、体験した人もいるでしょうし、誰が正しい、誰が正しくないと言えませんから、そういうことはしません。そういうことを考慮

してこういうプログラムを作っています。ですから、一つの点だけにフォーカスすると間違ったことになるので、総合的にならなければならぬので、いろんなことを考えてこちらが準備をします」さらに、「偏らないように作っているのですね」と尋ねると「中立の立場です。歴史については私たちが判断する立場ではないので、中立の立場で皆さんに見てもらおうとか話を聞いてもらおうとかしています」という答えが返ってきた。歴史を正確に伝えることが博物館の姿勢である。

4. 5 教育プログラムの特徴

以上の教育プログラムからいくつかの特徴を見ることができる。

第1に歴史教育を重視している点である。ほとんどすべてのプログラムで歴史の学習を何らかの形で取り入れている。作家の特別展との関連で行われている「Being Together Photo Essay Student Competition」は作家の主張も入っているため歴史的な学習に関しては基本的にはないと考えられる¹⁶。それはひとまず置き、他のプログラムを見るとかなりはっきりと歴史を教えるという目的が見えてくる。歴史を中心に据えた博物館であるため当然と言えるかもしれないが、それでも国のシラバスと関連しているなどまさに NMS の歴史教育における位置が定められていると考えられる。ただ博物館美術館は中立で民主的な場でなければならない。ミヒャエル・パーモンティエは「忍び寄る我々の社会の脱一民主主義化と、公共的議論文化の止めようのない衰退に直面すると、ミュージアムがこうした操作に対抗するためのうってつけの場所、民主的で歴史と将来を意識した議論しようとする公衆の最後の避難所のように思えてくるのです」と記している。ミュージアム＝博物館美術館の存在理由がそこにあるであろう¹⁷。

第2にナショナル・エデュケーションを行う場という位置づけについてである。ナショナル・エデュケーションは多民族国家であるシンガポールにおいて国家とは何か、を考えるものであろう。我が国ではイメージしにくい学習であるのですっきりと理解しがたいが多くのプログラムで関連づけられている。特に年少者向けのプログラムでは親しみやすく学べるように工夫されている。

第3に必ず博物館のギャラリーを活用することである。本物もしくは数多くの資料を有しているという博物館の強みを最大限に生かしてプログラム自体に厚みを与え参加者の興味をより強くしていくことがわかった。博物館でしかできない企画を考えることが大切なのである。学校でできるものであればわざわざ博物館には来ない。学校の強みと博物館の強みを十分理解し、博物館という資源を最大限に活用できるプログラムを考えている。

第4に参加者が中心になり自分たちで考え活動する内容が含まれていることである。年少者にはダンスや人形作りなどの活動があり、中学生以上でも集団によるゲームやロールプレイなどを行うようになっている。また映像制作などまさに作家として扱われるような活動も存在している。

第5にプログラムの内容が一般の市民を常に意識していることである。ライフスタイルギャラリーでは、庶民の生活に焦点を当てた衣、食、写真、劇と映画といった展示を行っているし、歴史ギャラリーもイベントとパーソナルの2つのコースが用意されている。それ以外の特徴としてはプログラムの運営面に民間の会社関係している。博物館教育を専門にしている会社がありそこに依頼している。民間の力を活用している姿勢がわかった。

4. 6 NMS と美術教育との関係

これまでたびたび触れてきたとおり NMS は歴史を中心とした展示が主である。これは館の役割がそうなっていると考えられる。従って各教育プログラムの説明にある「カリキュラムとの関連」にも ART という言葉は出てこない。NMS では美術教育は全く無縁なのだろうか。そうではないであろう。今まで見てきたように各プログラムの中にはほとんど全てにおいて美術教育に関連する活動がある。ポップアップ絵本制作（昔のシンガポールからのお話）、工作（自由な発想で）、人形制作（生き生き人形劇）、写真表現（私たちの世界の人々）、動画による映像表現（5 分間で思い出すこと）等である。歴史や文化を学ぶことにおいても、美術の学びは多く行われているのである。社会や歴史などの学びと美術の学びが共存しているのである。NMS が歴史や文化を扱う施設であるから ART は表面的には出てこないのかもしれない。作家の企画展などと連携した展示は美術が全面に出る活動ももちろんある。こう見ると NMS も学際的な学びの中で美術的な学びを行っていると考えられる。

5 学際的な意味

次にこれらのプログラムについて学際的な意味から考えてみたい。今回の調査は国際バカロレアの教育についてシンガポールの学校及びアジア太平洋オフィスについて現地の学校やオフィスを訪問しインタビュー等を行うことであった。また、博物館等の社会教育施設を訪れ、そこで行われている博物館教育を国際バカロレアの教育理念から考えることである。今までにもヨーロッパやアメリカの美術館博物館における教育を取材し担当者から話を聞いてきた。今回の調査では学際的な学び (transdisciplinary, interdisciplinary) について特に注目した。それは、今年度の研究として IB (International Baccalaureate) PYP (The Primary Years Programme = 初等課程プログラム) に取り組んだからである。PYP では知識、概念、技術、態度、行動、というを基本要素を six transdisciplinary themes として探究 (inquiry) のユニットで学ぶのである。PYP では transdisciplinary という言葉が使われる。これは「新たな広範囲にわたる視点を持つため、相互に関連性のある複雑な問題について、より深い理解のために、複数の学習領域にわたって、それを超え、その間にある、問題に焦点を合わせること^{*18}」とある。つまりある問題について学習領域をこえて学んでいくものである。一方 MYP (The Middle Years Programme = 中等課程プログラム) では interdisciplinary が使われる。これは「論理の方法、モデル、プロセスまたは形を 1 つの学習領域から他の領域に伝え、他の範囲内で適用すること^{*19}」である。つまり、複数の学習領域を用いて一つの真理を追究していくものである。ここで見ると transdisciplinary を使用している PYP が interdisciplinary を使用している MYP より学習領域を超えた学習をしている。成長するにつれて教科の独立性が強くなっている。NMS では中学校用のシンガポールの歴史—日本の占領で Inter-disciplinary という単語が使われている^{*20}。社会科、歴史教育、ナショナル・エデュケーションの学際的な学びをおこなうということである^{*21}。ここでは国のシラバスの補完という意味もあるわけであるから、教科性は重視されている。低学年向けのプログラムでは、例えば「生き生き人形」では、人形遊びを通して複数の領域の学びを行っていくことになる。これはまさに transdisciplinary を実践している。以上

のような教育プログラムを見てみると博物館教育は複数の教科にまたがっている学際的 transdisciplinary, interdisciplinary な学びを行っていると考えられる。

6 おわりに

学びとは本来学問のための学問ではないはずである。実社会に生かせることを学ぶのであり、実社会と何らかの関連があることを学ぶのであろう。今回の NMS の教育プログラムは博物館という日常とは切り離されたと一般にとらえられがちな空間を使い、一般の市民の生活や歴史を学ぶ教育を行っているということがわかった。また NMS の教育は IB の教育から見た場合、学際的な学びをしているという点において共通点がある。逆に言えば IB の学びは NMS での教育とも近いものがある。つまり、学校以外の施設とも関連性のある教育ということもいえるであろう。

(平成 23 - 25 年度科学研究費補助金 (基盤研究 (c)) 「国際バカロレア中等課程美術科カリキュラムの研究」 課題番号 23531168 の助成を受けている。)

*1 国際バカロレアの美術教育については、小池研二「国際バカロレア中等教育課程 (MYP) 芸術科についての基礎的研究」『美術科教育学』30 号、2009 年、pp.191-200、小池研二「国際バカロレア中等課程プログラム (MYP) 芸術科についての基礎的研究 (2) - 評価を中心として -」『美術教育学』32 号、2011、 pp.149-162 等参照

*2 吉田 正生「ナショナル・エデュケーション下のシンガポール初等社会科 (その 1)」『教育学部紀要』文教大学教育学部、第 44 集、2010 年、p.103 によれば「NE は 1997 年にシンガポール教育省によって導入されたものであり、その教育対象はすべての国民である。したがって NE は、学校教育 でありかつまた社会教育である」となっている。また、同 p.101 で同論考の主題を「ナショナル・エデュケーションをとりあげ、そのねらいが同国の初等社会科カリキュラムの構成枠にどのように影響を及ぼしているのかを明らかにしようとするもの」と述べている。ナショナル・エデュケーションが全員学習するものであり、一つの独立した教科ではなく、社会科カリキュラムの一部ということがわかる。

*3 杉本均 石川裕之 厳賢娥「シンガポールおよび韓国における才能教育の比較研究：エンリッチメントとアクセラレーション」『京都大学大学院教育学研究科紀要』2004、50 巻、p.65 エンリッチメントは杉本均らによるとエンリッチメント=深化・拡充教育は才能教育の一つとして行われているものである。杉本らの論考では才能教育として「優れた才能を持つ学習者に対して」行われるプログラムとして紹介されているが本論のケースはより広い生徒が対象になっていると思われる。

*4 NMS 内でインタビューを行った。当日は通訳を使った。

*5 佐々木宰「シンガポールの教育改革と初等学校図画工作新シラバス」『美術教育学』(26)、2005、p.205 の脚注の中で、「教科のカリキュラムとして示された文書を「シラバス」と呼んでいる。シラバスの記述内容は、おおむね日本の学習指導要領のそれに相当する」と記してある。なお、佐々木は最新の美術科シラバスを「シンガポールの初等教育における改訂美術教育課程：2009 年実施の新シラバスの概要」『北海道教育大学紀要. 教育

科学編』 62(2)、 2012、 pp.151-162、に記している。

*6 Island Adventures のパンフレットより

*7 Being Together: Family & Portraits- Photographing with John Clang 開催期間 2013 年 1 月 23 日ー 5 月 26 日 シンガポール国立博物館

*8 例えば文部科学省検定教科書『美術 2・3 下美術の力』光村図書 p.39 など

*9 例えば、社団法人日本広告写真家協会『『図工・美術授業にカメラ』始めよう、カメラの授業！』2010、ピエ・ブックスなど

*10 Wong 氏 から入手した資料より。なお資料の内容は web sight "<http://www.nationalmuseum.sg/NMSPortal/index.jsp>"にも記載されている。2013/09/29 アクセス。

*11 中村浩『ふらりあるきシンガポールの博物館』芙蓉出版、2013、p.20、によるとこの舞台は「1930 年代に中国の福建省の劇団シン・サイロクが使用していた」とある。「1000 個を超える豆電球で飾られ」、「1 時間ほどで組み立てられ、舞台が終われば解体される」との説明がある。

*12 NMS の所蔵品の中でも特に歴史的美術的に価値のあるもの 10 個が選ばれている。

*13 NMS 「ライフスタイルギャラリー ファッション パンフレット」より

*14 NMS 「ライフスタイルギャラリー ファッション パンフレット」より

*15 入手した資料もしくは前掲 web sight にある説明文より。直後の引用も同様

*16 もちろん家族について考えていけば、生きた時代背景など歴史は関連してくる。

*17 ミヒャエル・パーモンティエ著、真壁宏幹訳『ミュージアム・エデュケーションー感性と知性を拓く想起空間』慶應義塾大学出版、2012、p.196

*18 International Baccalaureate organization, *The Primary Years Programme as a model of transdisciplinary learning*, 2010, p.3

*19 *ibid.*, p.3

*20 入手した資料及び web sight にある説明文の 「This experiential workshop is inter-disciplinary and specially developed to complement the Ministry of Education's Social Studies, History and National Education syllabuses.」にある。

*21 全てが別の教科というわけではなくそれぞれの学問としての学びを学際的に行うという意味であろう。